

〔日本書紀神代〕一書曰略中 鱈魚策之曰略中 我王駿馬一尋鱈魚是當一日之内必奉致焉故今我歸

而使彼出來宜乘彼入海略下

〔日本書紀神武〕戊午年八月乙未天皇使徵兄猾及弟猾者略中 弟猾即詣至因拜軍門而告之曰臣兄

兄猾之爲逆狀也略下

〔古事記中應神〕於吉野之白檮上作橫白而於其橫白釀大御酒獻其大御酒之時擊口鼓爲伎而歌曰加

志能布邇余久須袁都久理余久須邇迦美斯意富美岐宇麻良爾岐許志母知袁勢麻呂賀知此歌者

國主等獻大贊之時時恒至于今詠之歌者也

〔古事記傳 三十三〕麻呂賀知は麻呂は我已など云が如し此稱いと古きを奈良よりあなたと書

なりての物には常多く見えたり古くも人名には多きも此よりぞ出けむ中略さて師説賀茂

眞淵に自麻呂と稱ふことはかしく古き名をかどありと云に對へてかどなくまるなりと云意に

物言とも聞えず漢意めきてこそおぼゆれ古の知は人を尊みて云稱にて略中 此は吾君と云意

〔土佐日記〕七日承平五年正月略中 ある人のこのわらはなるひそかにいふまろこのうたの

かへしせんといふ

〔枕草子八〕三十あまりばかりなる女のつばさうぞくなどにはあらでたゞ引はこえたるが丸は

七度まうで荷し侍るぞ略下

〔源氏物語花八〕わなくく、こゝに人のとの給へどまろ源氏はみな人にゆるされたればめし

よせたりともなでうことかあらん略下

〔雅亮裝束抄三〕これは本には三卷まき物にてあるを一帖にかきうつしたるなり略中 かしらが

きはこ殿公藤原の御てなりそれをみなかきうつしたるなりかたかなにてかきたることはわ

らは多藤原がかきたるなり